

事業に対する評価

| | | |
|-------|------------------|---|
| 19:30 | にっぽん丸・ダイニング瑞穂 | レセプション・ディナーを開催し、色とりどりの民族衣装を着た参加青年が、ブリスベンの寄港地活動に協力してくれた関係者らを歓迎した。クイーンズランド総督ポール・デ・ジャージー閣下や田中一成在ブリスベン日本国総領事からのスピーチに続き、参加青年は和太鼓やさんさ踊りを披露した。 |
| 2日目 | 場所 | 活動内容 |
| 9:30 | レッドクリフビーチ | ビーチで水難事故の予防や人命救助に取り組む Surf Lifesaving Australia を訪問。参加青年は九つのグループに分かれ、Surf Lifesaving のボランティアの指示に従ってビーチフラッグやシーカヤックなどのアクティビティに参加した。 |
| 14:30 | ブリスベン市街 | フリータイム。自由行動を基本としつつ、オーストラリアの参加青年や既参加青年、現地ボランティアによるツアーも開催された。 |
| 21:30 | にっぽん丸 | 帰船 |
| 3日目 | 場所 | 活動内容 |
| 9:30 | クイーンズランド大学 | クイーンズランド大学を訪問し、オーストラリア既参加青年たちによるワークショップや講義に参加した。参加青年が世界の様々な国の代表者に扮してディスカッションをする模擬国連や、気候変動を分析して今後、地球に起こりえる変化を予測する講義などが行われた。 |
| 13:00 | クリーブランド・ショウグラウンド | 地元のロータリー・クラブのメンバーが企画するスポーツ大会。先住民族の伝統ダンスを鑑賞した後、参加青年はソーラン節とさんさ踊りを披露した。その後、四つのグループに分かれてチーム対抗の競技に参加した。 |
| 17:00 | にっぽん丸・ドルフィンホール | 参加青年帰船、出国手続き |
| 19:00 | ブリスベン港 | ホニアラに向けて出港 |

帰国後研修

3月1日及び2日の二日間は日本参加青年に対し、ル・ポール麹町において帰国後研修を行った。研修では、ナショナル・リーダー、サブ・ナショナル・リーダー主導でプログラムの振り返り等を行ったほか、5月に開催さ

れる帰国報告会の実行委員を募った。また、本事業で得た知識や経験などをいかす事後活動のネットワークについて日本青年国際交流機構の代表者より説明された。



管理官評価

内閣府国際調整官 駒形 健一

2019年1月28日に横浜大さん橋から大勢の家族や友人に見送られ「にっぽん丸」で旅立った明治150年記念「世界青年の船」事業は、沖縄、パラオ、オーストラリア（ダーウィン、ブリスベン）、ソロモン諸島に寄港し、34日間の船上活動を終え、3月1日に無事、東京・晴海港に帰ってきました。途中下船もなく、240人全員がプログラムを完遂し修了書を手にとることができたのも、参加青年（PY）の努力はもちろん、多くの関係者の献身的な協力があったためと、心から感謝したいと思います。解散交歓会で別れを惜しむPYの顔は、涙目ながら皆輝きに満ちている感じがしました。下船して空港に向かう外国参加青年一人一人にお別れの挨拶をしましたが、皆、それぞれの表現の仕方でも感謝の言葉を述べていました。ナショナル・リーダー（NL）、PYの皆さんと共に今回の事業の成功を心から祝いたいと思います。

今回の事業は、個人的にも今までになく充実したものでしたが、直面した困難もいくつかありました。まず、例年のことですが、出航前研修の段階から発生したインフルエンザが出航後もなかなか収束しませんでした。NLの指導とPYの協力によって、プログラムの変更を最小限に抑え、沖縄訪問後にはマスク着用義務解除の宣言を発することができました。もう一つはブリスベンからの帰途、サイクロンや台風遭遇しかけたことです。多くのPYが船酔いに苦しみました。二宮船長の見事な航海術によって、嵐を回避しながら船の揺れを最小限に抑え、当初の予定どおり小笠原諸島を経由する航路を取ることができ、終盤のプログラムも完遂しながら、多くの島の景観やホエールウォッチングを楽しむという御褒美をいただくことができました。こうした困難を皆で克服することで、PYの船上での一体感がさらに醸成されたのではないかと思います。困難克服に大きく貢献したNLの皆さん、二宮船長やクルーの皆さん、そして世界船の主役であるPYの皆さんに改めて感謝したいと思います。

寄港地活動は、プログラム作りから受入れまで、現地同窓会組織が中心となって実施され、大きな成果を挙げることができたと思います。オーストラリアのNL、リーガンさんや同窓会組織をはじめ協力していただいた関係者に深く感謝したいと思います。各地での課題別視察や大学訪問は、船上のディスカッションの内容を深化させる効果がありました。ブリスベンでの野外活動はオース

トラリアらしさが出ていて、PY相互の交流を深めることができたと思います。また、ブリスベンでは、クイーンズランド州知事（総督）を代表が表敬訪問するだけでなく、総督自身が船上レセプションに出席し、PYと気さくに懇談されたことは、「世界青年の船」事業にとって光栄なことであり、PYにも貴重な経験になったと思います。パラオでのテンドーボートによる上陸は「世界青年の船」事業史上初体験でした。ソロモン諸島のホニアラでは、同窓会組織が協力してくれ、オーストラリアとは異なった、この島ならではの経験ができたと思います。

船上プログラムでは、指導官によるセミナーに替えてPY自らの企画・運営によるAll-PYセミナーを開催しましたが、PYの自主性と創造力が大いに発揮され、PY全体にとっても良い学びの場になったと思います。また、各国のナショナル・プレゼンテーション（NP）が、デリゲーションナイトと併せて実施されましたが、NP終了後に各国のダンスをPY皆で踊るなどしてNPの達成感を共有し、PY全体の一体感・連帯感を醸成する良い結果をもたらしたと感じました。

私自身、「世界青年の船」事業の管理官は4回目でした。20年前に管理官として初めて寄港したソロモン諸島のホニアラが、今回は最後の寄港地だったので、何か運命のようなものを感じます。航海中、節目節目でPYの活動を盛り上げるために微力ながら一役買わせてもらいましたが、PYと一体感を感じることができたのは望外の幸せです。11か国、240人が一緒に過ごした日々は二度と来ない人生の宝です。今や、PYの心の中に、船で培った友情の中にSWYという人生の宝があります。今回の貴重な経験は、PYがより良い人生を歩んでいくための羅針盤となり、時には、苦しみを癒してくれる酔い止め薬となってくれることでしょう。34日間「にっぽん丸」でNL、PYの皆さんと一緒に充実した日々を過ごさせてもらい心から感謝します。PYの皆さんがそれぞれの場でリーダーとして成長し輝いていく姿を見守っていきたいと思います。

Now I know, you are amazing! Now you know, SWY is a life changing experience!

Now we know, we are one family. Once a PY, forever a PY!（解散式での挨拶から）

各国ナショナル・リーダー評価

オーストラリア連邦

オーストラリアは明治150年記念「世界青年の船」事業に参加できたこと、全ての参加青年のグローバルな学びに貢献できたことに感謝しています。オーストラリア・デリゲーションは、地理的にも、倫理的にも、キャリアも多様で、オーストラリア社会の様々な側面を伝えることができました。

オーストラリア・デリゲーションは光栄にも大阪府を訪れることができました。大阪訪問はオーストラリアの参加青年にとって、日本、特に大阪のユニークな文化や歴史についての学びを深める機会になりました。オーストラリア・デリゲーションは大阪府庁を訪れ、府レベルでのつながりを築き、オーストラリアの州制と比較できる府政の仕組みを学ぶ重要な機会を得ました。私たちはまた大阪城などの歴史的な名所を訪れ、日本への理解、日本の生活の背後にある文化的背景についての理解を深めることになりました。

二日間地元の家庭でホームステイをしたことは文化的に非常に有意義で、オーストラリアの参加青年はその地域の日本人と人としてのつながりを築き、日本の日常生活を垣間見ることができました。この理解やつながりは、オーストラリアと日本の長期的な結びつきをつくるために重要です。ホストファミリーのみなさんと過ごした時間は短いものでしたが、出発時には多くの涙と抱擁を経験しました。

ダーウィンとブリスベンという二つの寄港地は、オーストラリアの参加青年にとって自身の国や文化、長所や短所を大々的に伝える特別な機会となりました。オーストラリアの参加青年たちはまた、事業を通じた経験により自身が成長したことで、これらの都市に新しい文化の

チリ共和国

今回の「世界青年の船」事業を通して、私たちは共に過ごした約6週間という期間にとどまらず、これから先、長く続いていく学びと経験を得ることができました。私たちが住み慣れた世界から一步を踏み出し、この事業に参加したことは、最良の選択だったと確信しています。

誰一人取り残すことなく、私たち全員が充実した船上生活を送ることができたのは、参加青年同士の協働に加え、ファシリテーターを含む管理部との連携の成果だと言

ナショナル・リーダー

レンズを携えて訪れ、自分の国を違った角度から見るることができたと伝えてくれました。寄港地活動はオーストラリアにとっても日本との強いつながりを示す機会となり、またそれを例に他国とのつながりを表すこともできました。オーストラリアの参加青年は、寄港地活動を通じて日本と日本文化をオーストラリアのコミュニティに披露する機会も得ました。

「世界青年の船」事業は、専門的・社会的レベルでの数え切れない国際的なつながりを形成する優れた環境をオーストラリアの参加青年に提供しました。オーストラリアの参加青年たちは多くのセミナーやワークショップを主導することで、仲間たちに彼らの知見や専門知識を共有するプラットフォームを得たのです。

明治150年記念「世界青年の船」事業は、この日本の歴史の中でも重要な部分を学ぶ機会をオーストラリアの参加青年に与えてくれました。参加青年たちは率直に意見交換すること、国際社会へ参加することなどの明治の精神とじっくり向き合うことができました。「世界青年の船」事業の全体の中でも最も重要な考え方の枠組みでした。

日本の内閣府が「世界青年の船」事業を通してオーストラリアの青年に投資をしてくださったおかげで、参加青年たちのリーダーシップと異文化理解力は更に深まり、日本とオーストラリアの関係性は強化されました。オーストラリアの参加青年は「世界青年の船」事業で学んだことをいかし、彼らの中にある日本と日本人々・その文化への確かな理解、そしてオーストラリアと日本との関係の大切さを胸に、ビジネス、政府、各コミュニティでリーダーとして活躍を続けることでしょう。

ナショナル・リーダー

えます。このようなすばらしい航海は、事業に対する内閣府の投資と尽力がなければ実現することはありません。

「世界青年の船」事業は、感情を揺さぶる旅路であり、幸運にもこの船に乗ることができたすべての青年たちの間で、お互いへの深い理解を養うことができる世界で唯一の航海でもあります。今年度のチリの参加青年の選考においては、ボランティア、非営利活動、起業などを通じた地域活動に実績があることを重視しました。こうし

て選ばれた青年たちは、チリの代表であるという強い自覚を持って、日本とその他の国の青年たちとの友好を育むことができました。

日本に到着すると、スウェーデンの参加青年と共に、私たちは三重県の地方プログラムに参加しました。限られた日数ではありましたが、これから先、ずっと大切にしていきたいと思えるような経験をさせてもらいました。例えば、訪問先の相可高校では料理や折り紙、生け花を通して日本文化に触れ、ホームステイでは、何にも代え難い思い出を得ることができました。地方プログラムを終えた後は、東京の陸上研修に参加し、ナショナル・リーダーとアシスタント・ナショナル・リーダーを対象とした皇太子殿下の御接見と内閣総理大臣への表敬訪問の機会に恵まれました。

につぼん丸乗船後は、ナショナル・プレゼンテーションが各国の魅力を伝え、コース・ディスカッションが、異なる国の共通課題について議論する機会を与えてくれました。多種多様なトピックに彩られたPeer-Learningセミナーや、リーダーシップ、異文化理解などのテーマを扱ったAll-PYセミナーは、企画・実施を任された参加青年が自らの情熱やリーダーシップを存分に開花させるまたとない機会になりました。セミナーの実施を通して、持ち得るスキルや知識を他の参加青年と共有し、様々な文化が交わり、主催した参加青年自身にも学びが多いセミナーとなりました。セミナーに参加する側の青年たちがたくさんの知識を得たことは言うまでもありません。

書道や空手、タンザニアやチリのダンス、トルコやギリシャ、チリの言語、スウェーデンの教会文化や日本の

昔話などを学ぶことができたクラブ活動は、体験を通して活発に他国の文化について知ることができる素晴らしい研修でした。航海の終盤に開催されたエキシビジョンでは、各クラブでの学びをパフォーマンス形式で参加青年が発表しました。

自主活動は参加青年の間で人気の高い、有意義な活動でした。ジェンダーに焦点を当てたレディー/ジェントルマンナイトや、各国の民族衣装をまとったファッションショー、特技を披露したタレントショー、デッキから夜空を見上げる星空教室、その他にもドキュメンタリーやトークショー、スポーツ大会やダンスなど、たくさんの自主活動が実施されました。

寄港地活動はそれぞれの場所の文化や社会課題を学ぶ絶好の機会となりました。沖縄、ダーウィン、ブリスベンでは、現地の青年たちと交流し、施設や機関を訪問し、さらに自由時間を活用して自分たちでその地を散策することができ、いずれの寄港地も興味深く学びに満ちた時間を過ごすことができました。例えば沖縄では、第二次世界大戦がその土地に与えた影響を学び、ダーウィンとブリスベンでは、歴史あるアボリジニの先住民の文化に触れることができました。

旅を終えた今、服と食べ物とお土産だけではなく、楽しかった思い出とこの事業を通して培った友好が私たちのスーツケースを満たしています。旅を通して学んだことを自国に持ち帰り、よりよい社会へと導く変化の担い手となることを約束し合って私たちは別れます。一人一人が、それぞれの場所でこの事業の可能性を信じ、お互いにつながり続けることができれば、私たちが成し得る変化に終わりはないでしょう。

エクアドル共和国

ナショナル・リーダー

本事業に、大きな責任を伴うナショナル・リーダー（以下NLとする）として乗船できたことを非常に光栄に思います。異文化や異なる背景、宗教を持つ参加青年たちを一つの家族にするような不思議な力がこのプログラムにはあるように思います。私たちのプログラムは日本を訪れる前に始まり、エクアドル各地から集まった初対面の11人が家族となり、他文化から多くのことを学びながら、祖国を代表する重要な役割を果たすべく共に協力し、自分たちの文化を全参加青年に伝えられるよう励んできました。

私たちの旅の第2章は東京に着いたときから始まりました。全ての瞬間が私たちにとっては驚きの連続でした。街やビルの景色から、人々の様子や美しい魅惑的な街の明かりの全てが私たちを魅了しました。本事業が細部にわたってきちんと運営されていることや、全てのプログラム

いました。

私たちは船上研修のために2週間準備を行いました。この2週間でリーダーシップ・セミナーやコース・ディスカッション、管理部からのオリエンテーションや、NLによるアイスブレイキングなど私たちは本当に役立つ研修を受けることができました。国立オリンピック記念青少年総合センターでの陸上研修は私たちのモチベーションを上げ、リーダーシップスキルを向上させるための助走として必要な期間でした。さらに、ナショナル・リーダーとアシスタント・ナショナル・リーダーは生涯に一度の経験である皇太子殿下との御接見や内閣総理大臣表敬訪問の機会を得ることができました。

につぼん丸という船名を私たちは一か月間の我が家として呼ぶこととなりました。船上生活はコース・ディスカッションや参加青年同士で共有した経験や知識に限らず、あらゆる場面で自分自身を知ることであり、全てが学びの場でした。

ギリシャ共和国

明治150年記念「世界青年の船」事業に12人のギリシャのデリゲーションが派遣されたことはギリシャと日本の修好120周年の文化的な出来事の大きな幕開けとなりました。日本は今年、明治元年から150年目にあたり、またギリシャ発祥のオリンピックが来年、東京で開催されます。両国にとって記念すべき行事を迎えるこの年に、両国の友好を深められたことは、事業へのギリシャの参加をより特別で意義深いものとしてくれました。

一見するとまったく似ていないギリシャと日本ですが、両者には、家族観やホスピタリティ、伝統と文化の間の強い結びつきなどの点において、多くの共通点がうかがえます。さらに踏み込んで両国に目を向ければ、日々の生活において個人が直面する苦悩や国家としての課題などにおいても、類似性を見つけることができました。本事業は、一生に一度の機会として参加青年にお互いの共通点を受け入れ、また相違点よりも共通点が私たちに根づいているということを感じさせてくれました。

プログラムの終盤には、国籍とは関係なく全員が友達となり、何事も正直に共有することができ、メディアの偏見なく話を聞き、お互いを理解して相互に意見を交わし、個人的な悩みから国家レベルやさらにはグローバルな課題に至るまでのお互いに共通で抱えている課題を解決するために行動を起こすことができるまでになりました。

私たちのデリゲーションにとって、日本に来て同じ志を持つ海外の仲間たちとともに一緒に体験を作り上げることができたことは有意義な経験となりました。

本事業は参加青年に異文化を愛し、尊重することを伝え、

私たちは240人のリーダーと生活を共にし、ナショナル・プレゼンテーションや、All-PYセミナー、Peer-Learningセミナーを通してそれぞれの国について意見を交換し学ぶという一生経験できないだろうと思っていたことを経験できました。未知のものへの恐怖、新しい学びや成長に対する高揚、人生においてかけがえのない人と出会う喜び、また会うことを約束し、別れた最終日の悲しみなど、船上の経験は私たちに様々な感情を与えてくれました。しかし、私にとってこれらの感情はまたすぐ訪れる「再会」に向かった感情であると確信しています。

本事業は世界をより良くすることに貢献する未来のリーダーを育成するにとどまらず、この素晴らしいプログラムを経験したことがない人には説明ができない何か不思議な力を生み出していると思います。私たちが本事業に参加できたことがどれほど幸福なことであったかいまだに信じられません。生涯かけて感謝し続けていくことでしょう。

ナショナル・リーダー

また同時に自国の文化への感謝の念に気付かせてくれました。結果として、本事業を通じてそれぞれの文化が比類のないものであり、この色とりどりの世界に寄与しているということに参加青年は理解することができました。異なる文化背景を持つ参加青年同士が意見を伝え、経験を共有する安心できる場所が提供される機会を得られたことを大変感謝しています。

日本政府が本事業を通じて起こした奇跡を容易には説明することはできません。日本国政府がこの事業へ費やした多大な御尽力に対して、私たちの感謝の気持ちは言葉では到底伝えることができないのです。「世界青年の船」事業を成功裏に収めることに大きく貢献した一人一人に対して心から厚く感謝申し上げます。

この事業が参加青年に与える長期的影響を考えると、感謝の念は一人一人が行動を通してこれから先何年にもかけて表し続けていくものでしょう。

古代から現代にかけて、オリンピック聖火は平和の象徴として世界中を旅し、各国を結び付けてきました。それと同様に「世界青年の船」事業は、平和の船として世界中を巡航し、長く続く真の友情を築くための家として他国からの若きリーダーたちを結び続けています。

差別や不寛容が叫ばれる私たちの現社会において本事業のようなネットワークを形成することの必要性は今まで以上に喫緊の課題となっています。「世界青年の船」事業は、国を超えた友情の架け橋にとどまらず、世界が私たちを必要としているということや、私たちは一人ではないということに気付かせてくれる希望の架け橋です。

SWYの灯を絶やさぬように。Keep SWYing.

| 日本 | |
|--|--|
| <p>最初に、明治150年記念「世界青年の船」事業のナショナル・リーダー及びサブ・ナショナル・リーダーとして本プログラムに参加させていただき心より感謝申し上げます。122名の日本参加青年のリーダーとして、そして10名の各国ナショナル・リーダーと共に活動する貴重な機会をいただき、大変光栄に思います。</p> | <p>ナショナル・リーダー サブ・ナショナル・リーダー</p> <p>それぞれが望むすてきな未来を作り上げることができると思っています。プログラムを通して、参加青年は失敗を恐れず一歩前に踏み出し挑戦することで、未知の才能や能力を発見してきました。今後も、わたしたちの周りに広がるさまざまなリスクや変化にかかわらず、自分の可能性を信じて、共に深い喜びや興奮を味わうために仲間と手を取り合っていきたいと思っています。</p> |
| <p><多様性を受け入れること> 私たち参加青年にとって、約1か月の間、同じ屋根の下で寝食を共にし学び合う貴重でかけがえのない日々となりました。34日の航海の間、関係を作り上げる過程で異なる価値観を理由に衝突することもありました。しかし、お互いに共感できないこと、相手と異なることを恐れずに過ごした結果、参加青年は多くの学びを得られたことと思います。外見の違いにかかわらず、世界中のどんな人でもみんな同じ人間であることを、寝食を共にすることで気付いたことでしょう。お互い寄り添いながら、外見だけでない深いところで繋がり合うことで、絆を深めより良い世界を作っていけると私たちは強く信じています。</p> | <p><人のつながりを築き上げること> プログラムを通して、世界11か国240名の参加青年は強い絆を築き上げることができました。これらの絆こそが、国境を超えた友情の礎になると信じています。にっぽん丸で過ごした日々の中で、文化や言語、価値観の違いなどにより、時にもがき苦しむこともありました。しかしとことん語り合い、笑い、涙し、相互理解を深めることで、一人一人が今後も続く強いつながりを作りました。船の中で繰り返された「SWYファミリー」という言葉を胸に、平和で多様性あふれる世界を作るべく、活動を続けていくことを参加青年一人一人に期待します。</p> |
| <p><挑戦し失敗から学ぶこと> この事業の中で、誰もが安心して自分自身にチャレンジする環境を作ることを目指しました。挑戦して失敗し、失敗から学ぶことで、自分の中に眠っているポテンシャルに気がきます。一人一人がそれぞれ異なる能力や才能、魅力を持っています。そしてどんな壁にぶつかっても、自信がなくても、恐れることなく努力することで、</p> | <p>最後に、参加青年、ナショナル・リーダー、ファシリテーター、管理部、シップ・クルーの皆さん一人一人に、改めて感謝を申し上げます。情熱や才能あふれる参加青年が世界中から集結し、共に活動してきた経験はかけがえのないものです。本事業の後、参加青年が能力を最大限発揮し、それぞれの分野で変化を生み出すことを強く願っています。</p> |
| ソロモン諸島 | |
| <p>私たちの今後の人生を変えるであろう、すばらしい青年国際交流の機会を与えてくれた内閣府に対し、ソロモン諸島の参加青年一同、心から感謝を申し上げます。この事業を通じて、私たちを含む10か国の外国参加青年は、日本の文化や日々の生活、食べ物、人々との交流を体験し、揺るぎない友情とネットワークを構築し、自国と他国の文化に対する理解を深めることができました。 トルコの参加青年と共に、私たちは宮城県を訪問しました。熱烈な歓迎レセプションをはじめとする宮城県庁と宮城青年国際交流機構によって企画された活動は、ホスピタリティに溢れ、私たちを驚かせ、また感動させました。地方プログラムを通して、私たちは日本の文化や</p> | <p>ナショナル・リーダー</p> <p>日々の生活、社会課題やその解決に向けた取組などに対する理解を深めることができました。地元青年たちとは、自然災害について有意義なディスカッションを重ねる機会に恵まれ、自国の自然災害とどう付き合っていくかを考えさせられました。二日間にわたるホームステイは、日本の家庭の日常生活に触れる機会になるとともに、短い期間ながらもホストファミリーとのかけがえのない友情と忘れがたい思い出を与えてくれました。 地方プログラムを終え、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで参加青年同士の親睦を深めるアイスブレイク・セッションや、これから始まるコース・ディスカッションや委員会、レター・グループなど様々な活</p> |

| スウェーデン王国 | |
|--|---|
| <p>「世界青年の船」—これまでより更に重要な存在に 私たちは、グローバル化や保護主義、知識の欠如が、世界の脅威になりうる時代に生きています。だからこそ、世界はこうした脅威に立ち向かうことができる勇敢なリーダーを必要としています。公正かつ持続可能で、人々が豊かに暮らす未来のビジョンを描くことができるリーダーを。あるいは人々の多様性の価値や協調が生むシナジー、持続可能な変化によってもたらされる恩恵を見出すことができるリーダーを。 だからこそ、「世界青年の船」事業は今日、これまでよりも更に重要性を増しているのです。このすばらしい国際的・外交的努力によるプログラムは、切迫した国際問題を扱う唯一無二の取組です。この栄えある役割を国際的に実施し広げていくよう選ばれたことを、私たちは内閣府に感謝してやみません。</p> | <p>ナショナル・リーダー</p> <p>乗船のために横浜に移動すると、私たちを含む全ての参加青年は、次第にワクワク感が高まっていくのを感じました。にっぽん丸では、学びや交流、挑戦、楽しさに満ちた船上生活が待っていました。ソロモン諸島の参加青年にとって一番大きな学びとなったものは、外の世界から切り離された私たちのホーム、にっぽん丸という環境でした。34日間の船上生活で、私たちは議論し、学び、分かち合い、共に過ごす時間の中でリーダーシップを育みました。 最初の寄港地の那覇では、沖縄科学技術大学院大学や沖縄平和祈念資料館などを訪問し、オーストラリアのダーウィンに寄港した際は、州議事堂での地域住民との昼食会や、チャールズ・ダーウィン大学における気候変動に関するパネル・ディスカッションに参加しました。</p> |
| <p>受け継がれる明治維新の精神 「人生に恐れるべきことなど何もない—理解すべきことがあるだけだ。今こそ、更に理解をする時だ。そうすれば、恐れは更に少なくなるだろう。」ポーランド系フランス人の優れたノーベル賞受賞者、マリア・スクウォドフスカ＝キュリーのこの言葉はとても正確に、「世界青年の船」事業の本質を指摘しています。しかし同時に、この本質は国際社会との協働に可能性を見いだした150年前の日本のリーダーたちの勇気ある志にも触れるものです。</p> | <p>本年の「世界青年の船」事業はこのような価値観と、これまで毎年明治の精神を以って続けられてきたこの事業を称えました。本プログラムの修了により、今年新たに240名の青年が同窓生となり、7,000人を超える世界規模の同窓生コミュニティに加わりました。理解・平和・国際協調の新たな使節となったのです。</p> |
| <p>文化理解力促進の成功 しかし、「世界青年の船」事業から得た経験の本当の力は下船後の数か月、数年を経て初めて明らかになるのです。「世界青年の船」事後活動組織を通じて、事業参加年度にかかわらず、私たちの国際的なネットワークは広がり続けています。事後活動の生み出すつながりや機会、可能性によって、プロフェッショナルスキルや個人の成長、そして国際交流のすばらしい発展が見込めるでしょう。だからこそ、「世界青年の船」事業の真価を見抜くにはその後数年を要するのです。 そのため既参加青年がファシリテーター、管理部員、ナショナル・リーダーとして再び乗船することは大きな強みとなります。本年のナショナル・リーダー・チームは多様性に溢れたリーダーの集まりで、私たちの成功を実感することができました。これまでの「世界青年の船」事業の経験値の集結のおかげであり、このプログラムにとっても新しい幾人かのすばらしいリーダーの知見が加わったきっかけであり、また、私たちの年齢・性別のバラ</p> | <p>ナショナル・リーダー</p> <p>私たちの「世界青年の船」事業は、国同士の友好を育み、国際協調と相互理解を促進するプラットフォームだと言えます。ますます国際化が進む今日の世界で、その最前線でリーダーシップを発揮している日本国政府と、他国の若いリーダーたちとの交流の機会に積極的に飛び込んでくれた参加青年たちに、改めて感謝申し上げます。</p> |

太平洋に浮かぶこの島で、アフリカの大地のような居心地の良さを感じました。

世界中の文化、それぞれの価値を再認識できたことは、タンザニア・デリゲーションにとって大きな学びとなりました。また、彼らに私たちの文化を紹介することもでき、自国に対して新たな情熱と複雑性を共に発見することができました。

明治のミッションに生きる

私たちはそれぞれの国や地域に戻り、本プログラムの既参加者として2018年度のプログラムで得た教訓やスキルを発揮していくことになるでしょう。日本と参加した9か国の面影をそれぞれ故郷に持ち帰り、「世界青年の船」精神を持った若いリーダーたちが、前向きな変化の先駆者になることを保証します。深呼吸して潮の香りを楽しんだだけでなく、私たちは平和の促進や異文化理解、国の発展のために尽力したのです。

ナショナル・リーダー

ファミリーと強い結びつきを得て、感謝の気持ちを抱きながら東京へと戻りました。

陸上研修と船上研修

私たちは国立オリンピック記念青少年総合センターで日本参加青年と顔合わせをしました。1週間の陸上研修は設備がよく整ったこのセンターで開始されました。船上生活の34日間は「一期一会」で、一生に一度の経験でした。私たちは活動を企画運営したり、他の参加青年と一緒にディスカッションをしました。異文化を背景に持つ参加青年たちと協働して課題を解決し、にっぽん丸はこの旅路の家として私たちを受け入れてくれました。

寄港地活動

沖縄：沖縄では参加青年が希望する視察先ごとにグループに分かれて課題別視察を行いました。
 ダーウィン：参加青年は州議事堂を訪問し、さんさ踊りやスピーチなどを披露し、この場所で昼食を取りました。その後、全員でチャールズ・ダーウィン大学を訪問しました。大学では歓迎スピーチがあり、参加青年はパネルディスカッションに参加しました。
 ブリスベン：ブリスベンではコース・ディスカッション毎に活動を行いました。

謝辞&結論

日本とオーストラリアに行くことは可能です。しかし、11か国から集まった240人の青年と共に日本からオーストラリアに行く経験はスケジュールを綿密に立てない

船上研修

日本の最南端にある、空手の生誕の地であり、科学技術分野の最も優れた大学院を擁する沖縄県を経験するには1日では足りませんでした。

ダーウィンとノーザン・テリトリー州は日本とオーストラリアの歴史・文化・協調のつぼでした。より良い未来を築くために過去を記憶しておくことの大切さをこの寄港地活動を通して学びました。

ブリスベン川に囲まれた賑やかな都市・ブリスベンでは多くの活動を行いました。若いリーダーたちはニュース編集室の実情をChannel 7で経験し、ライフセービング活動を行い、さらにはロータリークラブでスポーツや文化の交流もありました。

ソロモン諸島への訪問は、タンザニア・デリゲーションにとって、特別な体験となりました。ホニアラは、美しいビーチと温かい文化を持つ場所というだけではなく、私たちは

トルコ共和国

明治150年の記念すべき年に開催された「世界青年の船」事業に参加できたことは私や私のデリゲーションにとって光栄なことでした。本事業の目的やリーダーシップに対する考え方はあらゆる意味で、お互いに交わりながら学んでいくものでした。明治維新が日本を他文化と引き合わせ、「世界青年の船」事業は異なる国々の青年を引き合わせ、お互いに理解を深める機会を与えてくれました。

日本への出発前

トルコ・デリゲーションの選考は青年スポーツ省に1,200もの応募があり、スケジュールは難航しました。応募書類や面接での選考後、11人のデリゲーションが選拔されました。日本への出発前に私たちはオリエンテーションを行い、デリゲーションで一丸となり、本事業への準備を開始しました。

日本への出発と地方プログラム

私たちは地方プログラムで宮城県に受け入れていただき幸運に思います。荒浜小学校を視察し、自然災害がいかに破壊的かということを目の当たりにしました。七夕ミュージアムでは、宮城県の伝統的なお祭りの飾りなどを多数鑑賞することができました。すばらしいセレモニーの後に私たちはホストファミリーと対面し、二泊三日を一緒に過ごすことができ、本当に良かったです。私たちは仙台の歴史や文化的側面の美しさを探求し、日本の「おもてなし」を体験しました。これは文化交流を体験できる有意義な機会でした。私たちは一日でホスト

スウェーデン・デリゲーションからの気付き

多様でスキルのある熱心な個人々人を首尾良く本年の「世界青年の船」事業に参加するスウェーデン代表者に選ぶことができたのは、ストックホルムの日本国大使館の御尽力のおかげです。Swedish Instituteも参加青年の大きな助けとなりました。

スウェーデンの参加青年は、プログラム中、幅広い分野で活躍しました。人前で何かを発表したり、議論をリードしたりすることに加え、参加青年の間で仲介役や相談役を担いました。文化や社会の実情を伝えることに留まらず、彼らはスカンジナビアの価値観、すなわち多様性を受け入れ、協調性を重んじ、平等性と透明性のあるリーダーシップを実践しました。

受け取ったフィードバックから、私はスウェーデンの参加青年たちを非常に誇りに思い、彼らの献身的で熱心な働きは、SWYAA Swedenでの事後活動や他国の事後活動組織との協働においても発揮されると確信しています。

ナショナル・リーダー

ナショナル・リーダー

するのではなく、こうして人々と交流を重ねることが大切なのだと分かりました。

陸上研修

この時点まで参加青年の交流は外国参加青年同士のものに限られていたため、国立オリンピック記念青少年総合センターに向かい、半分以上を占める日本参加青年に出会えたことはとても嬉しいことでした。また、私たちはこの偉大なプログラムの重要性を支える管理部員の皆さんと、考える力を刺激するディスカッションの精神を支えるファシリテーターにも出会うことになりました。

私たちは、互いの違いにこそすばらしさがあることを実感しました。私たちがレター・グループを「多様な背景を持つ完璧な家族」と表現する理由はそこにあります。その家族は私たちの心に愛の足跡を残してくれました。

個人としてもナショナル・リーダーとしても、表敬訪問は人生を変える出来事でした。二人の力強い世界のリーダーの前に立つことができたことは、すばらしい経験でした。

次期天皇となられる皇太子殿下への御接見、安倍晋三首相への表敬訪問は、恐れ多くも自信につながる学びの場となりました。二人のリーダーはそれぞれの立ち居振る舞いから、リーダーシップと謙虚さを私たちに教えてくださいました。

ンスがとれていたおかげです。彼らのすばらしいチームワークに感謝していますし、今後また共に働ける機会を楽しみにしています。

将来の可能性と提案

- 「世界青年の船」事業が更に影響力を伸ばすために；
- 「世界青年の船」事業は世界に変化をもたらす高い志を持った国際的なコミュニティに加わるチケットなのだということを強調すること。
- 船上での研修はあくまで「世界青年の船」事業の始まりであり、本当の価値や結果は長期的な学びやつながりにあるのだと参加者にわかりやすく示すこと。
- 効果的なチーム運営における多様性の重要性を強調すること。特に異なる個性やスキル、強みはすばらしいチームを作るために不可欠であると強調すること。
- 事後活動を追跡する正式な方法を確立すること。もう少し支援があれば、よりすばらしいアイデアがプログラム後に実現するはずです。

タンザニア連合共和国

タンザニア連合共和国

タンザニア・デリゲーションの旅は、100通以上の出願書と幾度もの面接から始まり、慎重に選ばれた11人のリーダーたちは、ユニークで統一された目的地に向かって、祖国の進歩のために乗船しました。

地方プログラム

ほとんどのタンザニアの参加青年にとって、新幹線(弾丸列車)に乗ることは初めての経験でした。この日本の技術は、私たちに、必ずしも全ての弾丸が恐るべき対象ではないと教えてくれました。また、日本の交通機関から、定時性、一貫性、確実性を実感することができました。東京から大阪まで2時間だなんて！！

大阪府庁での大阪府副知事表敬訪問はすばらしいリーダーシップの発揮の機会でした。何かを一緒に為す姿勢や、注目を共有するということは、私たち一人一人が気質として持つべきものです。また、大阪城でもすばらしい時間を過ごしました。この城は建築、石材技術、そして防衛の奇跡の証拠です。

ホームステイの経験に関しても、すばらしいの一言に尽きます…温かい人々がつつましい家庭を開放し完全に見知らぬ人々を迎え入れ、1日の終わりには故郷から遠く離れた場所で家族の絆を結ぶことになったのです。日本文化を学ぶことはすばらしい経験でしたが、スワヒリ文化を彼らに伝えることもできてよかったです。

自分でたこ焼き作りをすることが良い経験になると誰が予想できたでしょう。スマートフォンの操作に忙しく

限りなかなかできるものではありません。この忘れることのできない貴重な経験をさせていただけたことを、内閣府の皆様、管理部の皆様、キャプテン、シッパクルの皆様など本事業に携わった方々に厚く感謝申し上げます。

アラブ首長国連邦

アラブ首長国連邦を代表して、内閣府をはじめ明治150年記念「世界青年の船」事業のすべての企画者の皆様に感謝申し上げます。「世界青年の船」は、未来の最良のリーダーになる青年たちに活力を与えるという、日本政府のビジョンを象徴するすばらしいプログラムです。

「世界青年の船」事業は世界中からやって来た多様な文化や伝統を持つ人々をつなぎ、約47日間で様々な国から来た青年を団結させる、すばらしいプログラムです。プログラム中ずっと、参加青年たちは外界とのつながりを断ち、SNSにもアクセスすることができない環境の中にいたことで、一人一人お互いによりつながりやすく、それぞれから学び合うことができました。

日本各地を訪れることからプログラムが始まったことはとても重要で、全ての外国参加青年が日本の文化や知識をより身近に学び得るという価値が付加されました。ホームステイによって日本の生活習慣を深く理解できたことは、日本参加青年と過ごす助けになりました。

陸上・船上研修に備えたセッションでは、日本参加青年と外国参加青年がオリンピックセンターで会うことになりました。参加青年たちが初めて出会う、充実した会になりました。お互いを知っていくこの旅路の始まりは、ナショナル・リーダーが主導するアイスブレイクから始まりました。

また以下のように、オリンピックセンターで始まり、その後船内で完結した活動もありました。

- ・ 各国紹介:それぞれのデリゲーションが二日間かけて、各国15分ずつのプレゼンテーションで自国を紹介しました。
- ・ ナショナル・プレゼンテーション:それぞれのデリゲ

す。トルコがグローバルな分野で重要な役割を果たし続け、このすばらしい国際的な事業に常に参加できればと思っています。

ナショナル・リーダー

ションが一夜ずつ、歌を歌ったり、ダンスを披露したり、故郷の美味しい食べ物を共有したりすることを通して各国の文化や伝統を伝えました。

- ・ クラブ活動:参加各国はそれぞれ、一つか二つのクラブ活動を企画することが求められ、すべての参加青年が活動に参加して互いに学びを深めました。
- ・ 寄港地活動:航海期間中には船が立ち寄った場所がいくつもありました。それぞれの場所で参加青年たちが楽しめるよう、様々な活動が用意されていました。
- ・ コース・ディスカッション:「世界青年の船」事業を通して、各参加青年は自身が選んだコース・ディスカッションに参加しました。コースは入念に選ばれたもので、参加青年のリーダーシップ能力を強化する助けになりました。
- ・ スポーツ&レクリエーション:プログラムには教育的側面だけでなく、参加者間の競争やチーム精神を構築するためのスポーツ活動もありました。
- ・ セミナー:2種類のセミナーがあり、一つ目は「All-PYセミナー」というすべての参加青年が参加しなければいけないセミナーでした。二つ目は「Peer-Learningセミナー」と呼ばれるもので、これらのセミナーは参加青年自らが企画したものでした。参加青年たちは自分と最もつながりのある、参加したいと思うPeer-Learningセミナーを選ぶことができました。
- ・ 課題別視察:各参加者のコースに応じて、入念に選ばれた場所を青年たちが訪れました。
- ・ 自主活動:1時間ほど様々な日程で設定された時間の中で、多くの参加青年が活動やイベントを企画し、参加したい人が自由に活動に加わることができました。

バヌアツ共和国

バヌアツ・デリゲーションは他の10か国と共に今年度の「世界青年の船」事業の一員となることができとても嬉しく思います。発展途上の島国であるバヌアツが8年ぶりに本事業に参加できたことを心から光栄に思います。

本事業が終了したことは、終わりを意味するのではなくそれぞれが自国に戻り、この事業で得た学びを見つめ直すという旅の始まりだと私たち全員は確信しています。この旅は学び、リーダーシップ、人との交流、意見や経験の共有、チームワークや青年としての責任感を深めていくことだと私は思います。

参加青年は、コース・ディスカッションやPeer-Learningセミナー、クラブ活動、自主活動、ナショナル・プレゼンテーション、課題別視察や表敬訪問を通して互いに知識やスキルを共有し深めていくことで、一人一人が望む変化を世界に起こせるという自信をつけることができました。

約47日間の学びと探求の中で、国立オリンピック記念青少年総合センターでの委員会活動やレター・グループ活動では全員が意見を述べ、お互いへの理解を深める機会があり、参加青年はリーダーシップを発揮することができました。左右、後方、前方からのリーダーシップや内なるリーダーシップを発揮することは私にとって挑戦を乗り越え、自分に内在するリーダー像に近づくことができ、とても有意義な経験となりました。本事業においての学びや勇気付けられた経験があったからこそ今日の私があります。世界中から集まった200人以上の若きリーダーたちと共に他にもないこの場所にたどり着いたことは、私が8年前に参加青年として本事業によって多くの影響を受けた経験があったからです。今回この人生を変える旅に私がナショナル・リーダー(以下NLとする)として戻ることができたことに対して日本国政府に心から厚く御礼申し上げます。さらに私たちは寄港地活動ですばらしい学びを与えてくれたオーストラリア政府にも深く感謝申し上げます。

バヌアツ・デリゲーションは宮崎県を訪問しました。青島のようなとてもユニークな場所や歴史がある宮崎に

ナショナル・リーダー

ついてIYEOの方々を紹介してくださりととても興味深かったです。さらには有名な牧場や、田野大根やぐらを見学することができたこともバヌアツに戻ってから周囲の人たちに伝えていきます。ホストファミリーと過ごした貴重な時間は、日本文化を理解する機会を私たちに与えてくれました。また、宮崎県知事とお会いすることができたことはバヌアツ・デリゲーションにとってとてもすばらしい経験となりました。バヌアツとUAEを受け入れてくれた美しい宮崎県に心から感謝申し上げます。

7人のすばらしいファシリテーターと共にいっぽん丸に乗船できたことは非常に貴重な経験となり、彼らなしには学びは楽しいものとはなりません。ファシリテーターの御尽力のおかげで私たちは多くのことを学び、多くの影響を受けました。「早く行きたいなら一人で行け。遠くへ行きたいなら皆で行け。」というエンパワメントコースのファシリテーターのポール・ファリス氏から、勇気付けられる言葉を私たちはいただき、私たちが望む変化を起こすべく皆で共に道を進む所存です。グローバルヘルスコースのファシリテーターであるバトゥ・ムスマリ氏による「足元から行動し、地球規模で生きよ」という言葉によって私たちは実際に変化を起こす行動をするよう勇気づけられました。私たちがコンフォートゾーンを抜け出し、祖国バヌアツを代表するための自信を与えてくれたことをファシリテーターの皆様にも厚く感謝申し上げます。私たち一人一人が自国で必ずこの事業からの学びを周囲に伝え、様々なことに挑戦していくことでしょう。

バヌアツ・デリゲーションはこのすばらしい経験のために多大なる御尽力を頂いた管理部の皆様、知識やインスピレーションを与えてくれたファシリテーターの皆様、すばらしい活躍してくれたオーストラリア、チリ、エクアドル、ギリシャ、日本、ソロモン諸島、スウェーデン、タンザニア、トルコ、UAEのNLの皆様、すばらしいホスピタリティで迎え入れていただいたいっぽん丸の関係者の皆様に対して心から感謝申し上げます。皆様がいなければ私たちは変化できなかったと思います。

船長からのメッセージ

にっぽん丸 船長 二宮 悟志

航海が始まって間もない頃、船長講話の際、あるPYから「このSWY航海の船長であることを誇りに感じていますか?」という質問を受けました。その時、私は「今は、名誉よりも重大な責任を背負っていると感じています。この航海が終わった時には名誉と感ずるかもしれません」と答えました。航海が終わった今、その時思ったとおり今年度事業の船長であったことを誇りに思い、そう感じさせていただいた皆様には感謝しております。

思い起こせば出航式の際、これから始まる船上生活への不安のせいか、多くのPYは不安・緊張しているように見受けられましたが、那覇に着く頃には多くの笑顔が見られ、最後の寄港地ホニアラでは各国のPYが交じり合っ

て行動しているのを見かけ、これが今年度の「世界青年の船」事業の同期生になるのだと思いました。各寄港地活動、船内活動等、そして各自の自由時間では、何か貴重な経験はできたでしょうか、そして何か貴重なことを得ましたでしょうか。

また、海・船ならではの貴重な体験はできましたか。パラオ〜ダーウィン間でのシャチの群れとの遭遇。マジカルスクール南硫黄島、小笠原でのクジラウォッチング、ソウフ岩でのクジラ・イルカとの遭遇など、これらの体験も貴重な経験の一つとなっていれば幸いです。PYの

皆様はあまり気が付かなかったかもしれませんが、今回の航海では、自然の影響を大きく受けた航海でもありました。バヌアツで被害をもたらしたトロピカルサイクロン“OMA”が予定航路に近づいてくる予報となり、大幅に迂回する航路を取らざるを得なくなり、さらに、ホニアラ〜東京間では台風2号の影響により、この航路も大きく迂回しなければなりません。自然の偉大さも見えない所で経験していたのかもしれません。

最後になりますが、今航海、船内運営を適切に行い明治150年記念「世界青年の船」事業を成功に導いた駒形管理官並びに管理部の皆様、内閣府並びに日本青年国際交流機構等の方々、及び各寄港地にて御協力いただいた関係者の方々に、深く感謝申し上げます。そして、PYの皆様、にっぽん丸での34日は人生の中では短い時間ではありますが、この短い時間でも友情・信頼・尊敬等が生まれたならば幸いです。しかしながら、当プログラムが楽しかった、良い経験をしたでは終わらせず、今回得られたことや経験を今後の皆様の人生及び各参加国のため、または世界の人々のために役立てて頂ければと願っています。皆様とまたにっぽん丸でお会いできる日を楽しみにしております。ごきげんよう。

関係資料

